

<実践報告>

老年看護学前期実習における学生の学びに関する中間報告

Learning Outcome of the First-Term Geriatric Nursing Practicum Assessed by Written Self-Evaluation: Interim Report

駒井裕子¹, 福岡裕美子¹, 長澤久美子¹

Hiroko KOMAI, Yumiko FUKUOKA, Kumiko NAGASAWA

1 常葉大学健康科学部看護学科

Department of Nursing, Faculty of Health Science, Tokoha University

【要 旨】

常葉大学健康科学部看護学科（以下、本学科とする）における老年看護学実習は、3年次通年科目として配置している。3年次前期に特別養護老人ホームおよびナーシングホームで実施し、実習最終日に大学内での全体カンファレンスにより実習での学びの統合を図った。本研究は、学生が前期実習の自己評価として自由記載した内容から「体験からの学び」を明らかにすることを目的とした。学生の体験からの学びを、質的帰納的に類似性に基づいて抽象度を上げて分析した結果、【暮らしやすい環境の提供】【個々で違う加齢変化】【主体性を引き出す思いに添った援助】【思いをくみ取り ADL・QOL を維持する援助】【施設におけるチームマネジメント】【施設における情報共有の在り方】【関わりから気づいた高齢者の姿】【体験から理解したコミュニケーション方法】の8つのコアカテゴリーが抽出された。学生は前期実習の目標6項目に添った学びを得ており、目標はほぼ達成されていた。

Key Words : 老年看護学, 高齢者施設実習, 学生の学び

1. はじめに

高齢社会における医療施策として、2014年6月、地域における医療及び介護の総合的な確保を推進する医療確保総合介護推進法が制定され、2025年に向けて高齢者の療養生活の場は、徐々に在宅にシフトすることが明確になった。現状でも入院日数の短縮が進み、病院での臨地実習で入院高齢者の全体像を短期間で捉えることは学生にとって困難が生じており、大学のカリキュラム構築の上でも老年看護学実習の在り方を検討する必要があると求められている。

これをふまえ、開学3年目となる本学科における老年看護学実習は、日常生活援助を

必要とする高齢者や比較的医療依存度の高い高齢者をケアしている高齢者施設に注目し、施設で生活を送る高齢者を支える環境を理解すること、日常生活援助を体験しながら、自らの高齢者観を培うことを目的とした実習内容を構築した。

本研究は、実習目標に添って、学生が前期実習の自己評価として自由記載をした「体験からの学び」を用いて、学びの内容を明らかにすることを目的とした。老年看護学実習は通年の開講科目であるため、今回は老年看護学前期実習が終了した時点での分析であり、中間報告と位置づける。

2. 研究方法

2.1. 対象

本学科1回生70名中、同意を得られた学生68名（男性10名、女性58名）。

2.2. データ収集・分析方法

老年看護学前期実習5日目の全体カンファレンス終了後に提出された、実習の自己評価表の「体験からの学び」を用いて分析した。実習目標ごとの記述内容を、一意味一文として抽出し、記述内容の精読、テーマの抽出、カテゴリ化、コード化、表題の命名と6段階を経て分析した。

なお、データ分析の確実性の保障のために、老年看護学領域教員3名で、必要に応じてデータに戻りながら、精読と内容の合意を得るまで検討を重ねた。

3. 倫理的配慮

学生には、前期実習終了時に本研究の目的、内容を説明し、学生の実習記録の一部を用いること、参加は任意であること、参加しなくても不利益は被らないこと、前期実習成績評価報告終了後にデータ分析を開始すること、プライバシーは保護すること、及び得られたデータは学会での発表や論文にすること以外に使用しないことなどについて、パワーポイントと文書を使用して説明し、同意書の提出を持って同意とみなした。

なお本報告は、常葉大学理研究倫理委員会により承認を受けている（研静15-4）。

4. 老年看護学実習について

4.1. 老年看護学前期実習前の学習状況

老年看護学実習で目標到達するために必要な基礎知識は、2年前・後期に実施する老年の健康と看護ⅠおよびⅡでほぼ終了しており、実習と並行して、老年の健康と看護Ⅲで高齢

者の援助技術を学習している状況である。表1に科目の開講時期と科目の概要を示す。

表1 科目の概要

開講時期 【科目】	概要
2年前期 【老年の健康と看護Ⅰ】	高齢者の身体的・心理的・社会的特徴、高齢者を取り巻く社会情勢等の理解を深め、高齢者に対する具体的な援助方法を考える。
2年後期 【老年の健康と看護Ⅱ】	加齢や健康障害が日常生活に及ぼす影響を知り、家族を含めた高齢者に対する援助方法を学ぶ。
3年前期 【老年の健康と看護Ⅲ】	複合的な要因の影響を受ける高齢者の健康アセスメントを行い、必要な看護援助を導き出し、その具体的な技術を学ぶ。

4.2. 老年看護学前期実習の目標

老年看護学前期実習の目標（大項目）を表2に示す。

表2 老年看護学前期実習目標

1. 施設を利用している高齢者を取りまく環境を理解する。
2. 地域や施設で暮らす高齢者の身体的・心理的・社会的特徴がわかる。
3. 利用者がどのようなニーズを持っているのか気づき、その人にとって必要な援助を思い描くことが出来る。
4. 高齢者を支える他職種との連携について理解できる。
5. 高齢者への関心を高め、高齢者の敬意をもち接することができる。
6. 自己の高齢者観を培う。

4.3. 実習期間及び実習方法

実習期間は平成27年5月～7月の毎週金曜日に一人の学生が5日実習を行った。

実習スケジュールを表3に示す。

表3 実習スケジュール

	1日目(金)	2日目(金)	3日目(金)	4日目(金)	5日目(金)
AM	学内実習	フロア	フロア	デイサービス	学内学びの整理
PM	施設実習				学びの発表

5. 結果

看護学生 68 名の学びの記述内容から、体験からの学びを抽出し、記述した。総記述数は 489 であり、カテゴリー数は 28、コアカテゴリー数は 8 であった。以下、コアカテゴリーは【 】, カテゴリーは〈 〉, 記述は「 」で示す。また表 4 にカテゴリー、コアカテゴリーの詳細を示す。

高齢者施設での実習における、学生の学びの記述から抽出されたコアカテゴリーは、

【暮らしやすい環境の提供】【個々で違う加齢変化】【主体性を引き出す思いに添った援助】【思いをくみ取り ADL・QOL を維持する援助】【施設におけるチームマネジメント】【施設における情報共有の在り方】【関わりから気づいた高齢者の姿】【体験から理解したコミュニケーション方法】であった。

【暮らしやすい環境の提供】で最も記述が多かったのは、〈入居者が暮らしやすい環境の提供〉であり、次が〈楽しく暮らすための

表 4 老年看護学実習前期実習の学びの内容

No	コアカテゴリー	カテゴリー(記述数)
I	暮らしやすい環境の提供	ケアの安全(5) 入居者が暮らしやすい環境の提供(74) 楽しく暮らすための支援(15)
II	個々で違う加齢変化	高齢者の違いを知ることの大切さ(16) 高齢者の身体的特徴の理解(23) 定型的ではない加齢変化の様相(15)
III	主体性を引き出す思いに添った援助	思いに沿った援助の検討(18) 自立を支えるケアの提供(11) 主体的な意欲を引き出す説明(9) 生活リズムを守り張りのある生活(19) ペースの主導は高齢者(11)
IV	思いをくみ取りADL・QOLを維持する援助	残存機能を生かしたケア(7) 残存機能を見出して援助する(18) 言葉に頼らない観察とケア(15) 関わり、観察から引き出す高齢者の思い(9)
V	施設におけるチームマネジメント	専門職による健康管理で安心な生活(10) 施設における看護師の健康マネジメント役割(6) 専門職協働の意味(28) 他職種と連携して支えるケア(1)
VI	施設における情報共有の在り方	フレキシブルな情報共有の方法(57) 情報共有の目的(8)
VII	関わりから気づいた高齢者の姿	関わりにより実感した高齢者像(34) 関わりから気づいた認知症高齢者の姿(8)
VIII	体験から理解したコミュニケーション方法	思い出を語ってもらうことの大切さ(12) コミュニケーションの工夫(14) 笑顔で視て触れて聴くコミュニケーション(31) 必要とする人とのつながり方(8) 自分のコミュニケーションの再確認(7)

支援)〈ケアの安全〉である。「自宅のような環境を維持する」ために、「居室のレイアウトが各自の好みや身体機能によって自由である」ことや「バリアフリー」「スライドドアの多用」があげられた。また「入居前と同じ生活が送れる」ように、「朝着替えて、夜パジャマに更衣するなど生活リズムを大切に」「家族が24時間自由に入出りできる」「他の入居者とくつろいで交流できるよう配慮する」等、居室にこもらず人と交流できる環境を作っていることに気づいていた。

【個々で違う加齢変化】で最も多い記述は、〈高齢者の身体的特徴の理解〉であった。すでに学習した加齢変化は知識として持っているが、〈定型的ではない加齢変化の様相〉の記述も多くみられた。また、個別性のあるケアを提供するために個々の〈高齢者の違いを知ることの大切さ〉の記述も多くみられた。

【主体性を引き出す思いに添った援助】で最も多い記述は、〈生活リズムを守り張りのある生活〉であり、「その人にあったケアを大切にする」「入居者同士の交流を図り社会参加を促す」「入居者に合わせた生活リズムを大切にする」等が記述されていた。

〈思いに添った援助の検討〉の記述内容は、「考えや思いを尊重したサポートの大切さ」「受け止めて共感する姿勢」「個別性のある日常生活援助の提供」「その人のニーズに合わせた援助」「生活のペースやルールに合わせた援助」の他その人の思いを捉えるために「話しやすい環境をつくる」等が記述されていた。〈自立を支えるケアの提供〉では、「予防的ケアや個別性に応じたケア」「ROM運動の大切さ」「ワーカーとのかかわりの大切さ」が記述されている。〈ペースの主導は高齢者〉であり「高齢者のペースで関わりを進めていくと得られる情報が多い」等の記述がみられた。〈主体的な意欲を引き出す説明〉には、高齢者の障害の程度を問わず、「事前に説明同意の上での援助」「意欲や自己決定

できるための繰り返しの説明」「自立につながるための声掛け」等が記述されていた。

【思いをくみ取りADL・QOLを維持する援助】で最も多い記述は、ADLを現状より低下させないように〈残存機能を見出して援助する〉ことである。「残存機能を活用して自立を促すこと」「残存機能を活用してADL,QOLを維持すること」「出来ないことをできるようにする工夫や見出して支援すること」が記述されていた。また〈残存機能を生かしたケア〉には、スタッフの高齢者への関わりを観察し、「その人の持てる力を探して生かす」等、スタッフが実践しているケアの方法について記述されていた。〈言葉に頼らない観察とケア〉には、「かかわりの中で察知するニーズ」「言語表現が困難な高齢者の観察とケアの実際」が記述されていた。〈関わり、観察から引き出す高齢者の思い〉には、「高齢者ケアの基本は関わりと観察からであること」「そのかかわりから聞き出す高齢者の思い」「障がいや症状に合わせたアセスメントの重要性」そして「高齢者の思う生活を聞き続けるスタッフの姿勢」について記述されていた。

【施設におけるチームマネジメント】で最も多い記述は〈専門職協働の意味〉であった。各専門職の役割分担や協働による「丁寧で確実なケア」「協働による安心・安全なケアの実現」「専門性を生かした援助」等が記述されていた。〈専門職による健康管理で安心な生活〉には、「常勤看護師による健康管理」「看護師とケアワーカーがいることで安心できる施設での生活」「自然治癒力を高める援助」が挙げられており、〈施設における看護師の健康マネジメント役割〉には、「看護師のアセスメント能力」の他、〈他職種と連携して支えるケア〉が記述されていた。

【施設における情報共有の在り方】で最も多い記述は、〈フレキシブルな情報共有の方法〉である。「申し送りやミーティング」と

いうルーティンの機会だけではなく、「ともにケアを行う時」「記録や対話を通して逐次情報を共有する」こと。また「職種間の尊重が情報の共有に影響する」ことが記述されていた。〈情報共有の目的〉には、「効率の良いケア」「トラブル防止目的」「記録の正確性の確保」が挙げられていた。

【関わりから気づいた高齢者の姿】で最も記述が多かったのは〈関わりにより実感した高齢者像〉である。「个性的で多様性の多い存在」で、「障害を持って成長し続ける存在である」こと。また「これまでの生活体験や、社会的かかわりがその人を作る」「人生の尊敬する先輩」「看護師のケアにより影響を受ける存在」であり、関わったことで、これまで持っていたイメージが変化したことも挙げられていた。次に多かったのは〈関わりにより気づいた認知症高齢者の姿〉である。「関わる前の不安な気持ち」や「出会って知った認知症高齢者の身体的、心理的特徴の個性」「関わり方の配慮」などが記述されていた。

【体験から理解したコミュニケーション方法】で最も多い記述は、〈笑顔で視て触れて聴くコミュニケーション〉であり、「笑顔から始まる関係」「視線を合わせること」「触れてかわることの効果」「長期記憶を生かす関わり」等が挙げられていた。

〈コミュニケーションの工夫〉は、認知症の方とのコミュニケーションの中で、「会話への配慮や相互理解のツールとしてのコミュニケーション方法」が記述されていた。〈思い出を語ってもらうことの大切さ〉は「戦争体験」を含む「鮮明な思い出」「若いころの思い出」「楽しい思い出」が記述されていた。〈必要とする人とのつながり方〉には「人とつながり寂しさを緩和する」「入居者同士の交流のサポート」「笑顔を絶やさないと」が記述されていた。〈自分のコミュニケーションの再確認〉には「声のトーンや大きさ」

「表情」「ジェスチャー」などがあげられている。また「私から近づいていく」「共有した時間の中での観察」が記述されていた。

6. 考察

得られた結果をもとに、実習目標に照らし合わせ、学生の学びを考察する。

6.1. 施設を利用する高齢者を取りまく環境についての体験からの学び

今回の実習施設は医療施設ではなく、入居者が住まいとする生活の場である。対象は、自宅での介護が困難なために住み慣れた場を離れ、施設という集団での生活の中で暮らす高齢者である。対象となる高齢者の暮らす環境について学生は、施設概要ガイダンスや見学、またスタッフとともに活動し入居者と関わることによって3つの「取りまく環境」を捉えていた。

1つは建物の構造である。居室は高齢者が自由にレイアウトできる環境であった。高齢者が暮らしやすく、いつも近くに家族を感じることができるように、高齢者と家族・スタッフとで作る居室の様子を見て、離れて暮らす家族とのつながりを作る大切なプロセスであることを学んでいた。2つ目は組織運営に影響を受ける環境である。どのような環境を作り上げるにも、スタッフ個人の思いだけで現実化することは困難であり、運営者の理念や組織としての取り組みが重要であることに気づいていた。3つ目は直接的にケアに携わるスタッフによる生活支援環境である。家庭で生活しているときのリズムとあまり変わらない生活を送れるようにスタッフは心がけていること。またスタッフの日常生活を支援する技術が、高齢者の生活に大きな影響をもたらすことを理解したことで、スタッフの支援も環境の一部であると気づいていた。

スタッフの支援は、暮らしやすい環境を提供することにある。暮らしやすい環境とは、

入居前の生活と変わらない暮らしを送ることであると学生は考えており、その暮らしが施設で出来るようにスタッフで工夫することの大切さを、多くの学生が学んでいた。

また、学生はスタッフが実践している関わりと入居者の反応から、施設での援助で大切なケアには、自立を支えるケアと、楽しく暮らすための支援の2つがある、と考えていた。自立を支えるケアには、個別性に応じたケアや予防的ケアがあり、楽しく暮らすための支援には、人と交流したり、離れていても支える家族の存在が大切であることが挙げられていた。その人らしい生活を送っていただくために、生活を支えるスタッフの役割を学んでいたと考える。

6.2. 高齢者の身体的・精神的・社会的特徴についての体験からの学び

学生は、すでに講義で学んだ高齢者の特徴を、実際に関わってみて理解した、実感したという記述がほとんどだった。

最も多く実感したことは、皮膚の脆弱さであり、テキストで読む「脆弱」という言葉の意味を理解した、という学生が多かった。これは、ほぼ全介助でベッド上の生活を余儀なくされている高齢者の皮膚の状態だけではなく、比較的自立度の高い高齢者でも、軽度の擦過傷の治りにくさや、手に触れながらコミュニケーションをとる高齢者の皮膚の薄さ等からも、学ぶことが出来ていた。

日常生活援助を受けて生活を送る高齢者の、心理的・社会的特徴を捉えるプロセスでも、複数の高齢者と関わることによって、心の開き方や関わり方は人それぞれで多様性があることを理解し、一概に「高齢者」とくくれないということを理解していた。さらに、個性の強い高齢者、認知機能が低下している高齢者に対して、心を開いていただくにはどのようなコミュニケーション方法が有効なのか、認知機能の低下を予防するケアはどのよ

うに実施していくことがよいのかというところまで深まっていた。

6.3. 利用者のニーズに気づき、必要な援助を思い描くことの体験からの学び

今回の前期実習では、援助技術は単独で行わず、スタッフのケアに参加させていただく形をとった。学生の記述は、自分と入居者とのコミュニケーション場面から感じたこと、あるいは入居者とスタッフとの関わりやケアの場面を観察して、効果があると考えたコミュニケーション方法を学生自身が試してみた結果などが述べられていた。

対象を理解するためには、まずコミュニケーションから情報を収集するが、施設で暮らす高齢者の大半は、認知機能の低下を認め、ベッド上での生活で全介助状態の方が多い。よって健康状態の情報は看護師からの説明を受けることとし、スタッフの実際の関わりや、入居者の反応を見て、コミュニケーションをとるように計画をした。

学生の記述を見ると、関わりの1日目、2日目は戸惑いが多く、コミュニケーションをとる不安を述べていた。しかし3日目以降では、スタッフの支援を受けて実際に関わってみて、高齢者の肯定的な反応や思うような関係性が取れない中でも、体験からよりよいコミュニケーションの方法について考えることが出来ていた。そしてそこで引き出した反応や、スタッフが実際に行うケアの方法から、その人に必要な援助を導き出していた。

さらに学生は、様々な場面を振り返り、高齢者のケアを実践するときに大切にしたいことを2つ挙げていた。1つは、どの様な健康レベルにある高齢者—意思疎通が困難であったり、医療依存度が高い方であったり、認知症であっても—その人の主体性を引き出すために思いに添った援助を行うことが大切であると考えていた。主体性を引き出すためには、生活のペースの主導は高齢者にあること

や、その生活のリズムを守ることの大切さを認識し、高齢者自らがやる気になるような説明の工夫が必要であることを体験から学んでいた。

2つ目は、入居者の思いをくみ取る援助である。この援助には2つの方法があり、言葉に頼らないケアと、残存機能を生かしたケアが挙げられていた。言葉に頼らないケアの大切さを考えることが出来た場面として、言語的意思疎通がどれほど困難な方であっても、いつも必ず視線を合わせ、身体に優しく触れ、優しい言葉で説明や接触を繰り返すスタッフの姿が挙げられていた。入居者の瞬きやうなずき、指の動きなどの反応からニーズや反応をくみ取ってケアを行い、実際に安心して落ち着く入居者の反応から、言葉に頼らないケアの大切さを学んでいた。残存機能を生かしたケアを行うためには、まず高齢者自身が自分の持つ力に気づくことも大切であり、できないことを出来るようにする工夫がスタッフに必要なスキルであることを学生は学んでいた。

6.4. 施設における連携に関する学び

日々高齢者施設で活動する専門職は、看護師、ケアワーカー、ケアマネージャー、理学療法士、作業療法士である。施設により嘱託で医師、歯科医師、歯科衛生士、運動療法士等との連携がとられている。

施設における連携には、看護師によるチームマネジメント能力が必要であること、そして病院とは違う施設における情報共有の在り方の2つがあると気づいていた。看護師によるチームマネジメントには、高齢者に対する健康管理と、ケアワーカーに対する医療面でのアドバイスが含まれていた。一方、施設において情報を共有する目的は、効率の良いケアの実施やトラブルの防止のためであると考えていた。日々の看護・介護記録はスタッフの誰もが常に閲覧できる状態にして共有する

ことで、ケア活動に活かし、記録の正確性を確保する工夫をしていることを理解していた。

これまでの病院実習での体験から、学生が眼にした情報共有の場は、勤務ごとの申し送りやカンファレンスの場であった。一方施設では、朝夕の申し送りだけでなく、随時口頭で入居者の状況についての情報交換が行われ、記録をもとに報告・連絡・相談が徹底していた。この場面から学生は、情報共有がいかにかのケアの効率やトラブル防止に有効であるかを実感していた。

また、看護師とケアワーカーと一緒にケア活動を行い、同時に高齢者を観察し、それぞれの視点から得た情報を照らし合わせていた場面から、異なる職種間の尊重の気持ちが大切であること。そして尊重するためには、他の専門職はどのような役割を担うのか、を知ることによって、相互理解につながっていくことを学んでいた。

6.5. 高齢者への関心を高め、敬意をもって接することの体験からの学び

認知症高齢者、医療依存度が高く意思疎通が困難な高齢者と関わるケースも多く、学生はそのコミュニケーションに悩んでいた。しかしスタッフのアドバイスを受けて、見て触れて聴くコミュニケーションを実践し、信頼関係を作ることが出来たと感じている学生が多かった。この信頼構築をしていく過程を振り返ることで学生は、自分が普段会話するときの声のトーンや表情、ジェスチャーはどのようなのか等、自分のコミュニケーションの傾向を再確認していた。思うような関係性をとれなかったケースでも、時間を共有して黙ってそばにいて観察することで、関係性が深まったと実感する学生もいた。

認知症の方と関わりをもった学生は、思い出を語ることの大切さを実感していた。思い出には、楽しい思い出、若いころの思い出、

働いている頃の思い出など、話が弾むものもあるが、高齢者の気持ちは毎回同じではない。同じ話でも突然怒りはじめたり、何に怒ってしまったのかわからなくて困ってしまったと記述する学生もいた。必ず近くにはケアワーカーがいるため、自然に入ってきて学生のコミュニケーションをサポートしてくれたり、理由を説明してくれたりしたため、入居者がどんな反応を示しても、スタッフに促されて、複数の入居者とかわりを持つことが出来ていた。

これらの体験から学生は、どのような健康レベルにある高齢者でも、その人を理解するためには自分の思いだけではなく、コミュニケーション技法を学習して、どのような反応を示しても柔軟に対応できるスキルを持つことが、敬意をもって接するために必要であることを学んでいた。

6.6. 実習体験から自己の高齢者観を培う

施設に入居されている高齢者と初めて関わり、そこで実感した高齢者像は、個性的で多様性があり、障害があっても成長し続ける存在である、と述べていた。成長し続ける存在、と感じた理由として、多くの学生が同じ場面を記述している。看護師が、寝たきりで会話ができないと思える高齢者の手を握り、声をかけながらケアを行い、高齢者の視線や表情から、その意思を汲みとり高齢者の笑顔を引き出しているものであった。この場面からたとえ寝たきりでも高齢者の持つ強さ、たくましさ、目には見えないが、持てる力があることに気づき、これまで持っていた高齢者のイメージが変化したと述べていた。

一方で高齢者の持つ脆弱さにも気づいており、施設で暮らす高齢者は、生活遂行する上で他者の手を借りることは免れない現実から、看護師あるいはケアワーカーの能力によって生活が影響される、不安定な存在であることも学んでいた。

7. 結論

学生は前期実習の目標6項目に添った学びを得ており、目標はほぼ達成されていた。

今回明らかになった学生の学びの内容からは、高齢者施設で実習をすることによって理解することが出来た物理的・人的・組織システム環境や、看護師及びケアワーカーのアドバイスやロールモデルとして関わりの場を観察し、模倣することで体感した、高齢者の実際の姿が浮かび上がっていた。また、生活の場である高齢者施設においてその人の生活を支えるスタッフ、家族の関わり方や思いの強さにも気づくことができていた。

この結果をふまえ、後期実習では看護師やケアワーカーとともに、入居者の生活援助に参加して、体験することから学べる学習方法を深めるようにすすめていきたいと考える。

文献

- 1) 厚生労働省：医療介護総合確保推進法，2014/10/1
- 2) 文部科学省：看護教育のあり方に関する検討報告，看護実践能力のあり方に向けた大学卒業時の到達目標，2004/3/26
- 3) 厚生労働省：看護基礎教育のあり方に関する懇談会論点整理，2008/7/31
- 4) 駒井裕子：老年看護学実習において学生がもつ「老いる」ことのイメージ－ナーシングホーム実習記録の分析から実習指導方法の検討－. 静岡県看護研究発表会抄録集第29巻43～44，2012
- 5) 駒井裕子：老年期にある患者の全体像を捉える学生の思考プロセス. 第4回看護教育研究学会学術集15～16，2010
- 6) 久代和加子，梶井文子，亀井智子：老年看護臨地実習の教育評価：介護療養型医療施設と介護老人保健施設で実施したことの意義についての検討：聖路加看護大学紀要30，97～103，2004
- 7) 千葉真弓，原田美香，細田江美，他：介

護老人保健施設での老年看護実習における学生の学び．長野県看護大学紀要 10，21～32，2008

- 8) 小野幸子，原敦子，他：高齢者ケア施設における看護学実習を通じて学生が表現した高齢者看護の見方・考え方—ケースレポートより—．岐阜県立大学紀要 4-1，99～104，2000

